

2006年5月 グリーンルーム

テキスト&フォト = ツルノ・
デザイン = girasurf

「温故知新、サーフィンはマチュアー（成人）している」

by ウェイン・リンチ



the green room festival
supported by EDWIN

2004年10月

横山泰介先生にボウ・ヤングが逗子マリーナでNALU用に撮影して頂いた。車の屋根には赤いボンザーが載り、えらく似合っていた。

2005年9月10日（土曜日）

湘南・葉山・ソラヤで佐藤傳次郎さんのフィルム会にボウ・ヤングが招待された夜、我々向は早朝に秋田から新幹線で東京を経由して先ずは江ノ島でのイベントに出演、その足で葉山のソラヤへ入る予定だったが体力と気力の限界で会場に辿り付いたのは4時間遅れ。主催者からお叱りのひとつを覚悟して、そこには佐藤傳次郎先生の

「丁度良いタイミングですよ、アロハ、ようこそ」

の一言が我々をどれ程救ってくれたか。

正直1976年サーフィンワールドの写真集を見て以来ファンの一人であったが、私の目は間違っていなかったと確信した。ボウ・ヤングのライブの後、フィルムにKAZZの演奏がシンクロされ陶酔的な時間を共有させて頂いた。その時、伝次郎さんから

「グリーンルーム、良いパイブなイベントですよ。紹介しますよ。」

と優しいお言葉を頂戴した。アイランドから来ているにも関わらず動きが早いのがこの業界、編集長の一言「明日からインド

ネシア」で全ての予定が変わることもある。予定ばかりでなく人生まで変わった者もいたはずだ。嘘ではない、私の人生はあの82年のバリーで変わったのだから。ソラヤでの翌日、シドニーへの帰国前日、東京の芝のオフィスにK氏が訪ねて来てくれ、それは暑い午後だった。

2006年2月

K氏が打ち合わせを兼ねてシドニーへ来て一緒にサーフィンをして、PICO、ボウ・ヤング、マイク・マカーシーと会う。そこにはカメラマンのA氏と広告を制作するT氏が同行。ニューポートビーチで数日過ごし何かお互いに共有するものを私は感じた。ボウさんはベアーにスポンサーされているため、エドウィンの広告には登場しないが、これはその際、撮影された写真を基に制作された広告である。K氏は仕事の合間、というかサーフィンの合間に仕事をする、その姿勢に私は共感するものがあった。さらに波が小さくなった最終日、カメラマンのA氏も「昔サーフィンやった事があるのでボード貸してくれませんか」そしてA氏は僕のファンボードで沖へ向かい波と対面した。海から上がると満面笑顔で鼻のピアスが輝いていた。妻がA氏（実は我が家ではAちゃんと呼はせて頂いている）に「ハナピ、ご両親怒らないの？」とタイレストランでいきなり切り出した。妻は時に驚くほどストレートに触れてはいけなく、しかし知りたい事を「今？ここで？」みたいにつづける。A氏は「母親はいいんですけど、オヤジと会う時には外します」、私達夫婦の間ではAちゃんは良い

子である。

2006年5月20日

シドニーからは、ボウ・ヤングと相棒のDC、ミルトン・ブラウン（PICOバンド、及びアンドリュー・キッドマンに参加のギターリスト）、マイク・マカーシーがガルダに乗り、ブリスベンからはPICOと相棒のジェフが同じくガルダで到着した。シドニー組はバリーの8時間のトラージットを利用して夕暮れ前の3時間ドリームランドの4-6をゲット。クタの人気老舗バブチューブズのオーナー、シドニー・アバロン出身ジョニーの古くからの友人ミルトンの計らいで全員借り物のボードにビーチの物売りから購入したトランクでサーフィン出来た。ボウさんはロングで入り途中から偶然ラインナップで出会ったバイロンベイのローカルのツインフィッシュ、ディック・パンストラレンと交換して、誰よりも奥からテイクオフをして誰よりもインサイドまで乗り継ぎ、最後は遥か左奥からブレイクするレフトの終焉に当て込んでいた。マイク・マカーシーはハワイアンタイプのガン、ミルトンは典型的なINDOガン、私は8フットのラウンドノーズ、DCは'72"のエッグ、、、つまりジョニーは何でも持っている。遥か左にはインボッシブルのスーパー・グリグリレフトが5分間隔で入り、次々とサーファーが真ん丸いチューブの中を夕日のシルエットに照らされていた。バリーの夕日に魅了されうっかり暗くなるまでサーフィンしてしまい帰路は暗闇。しかし用意周到ジョニーの寒中電灯を頼りに暗闇を進みパーキングに着いた。

満天の星空が美しい。問題はこれから大阪へ行かなければならない。久々の大きな波に体力を使い切り深夜のフライトで大阪を目指した。気が付けば大阪新空港KIX、ここは海に浮かぶ飛行場、そのせいか足元が揺れていた。グリーンルームのM氏が大きなワンボックスで迎えに着たが大人7名にギターとサーフボードと個人の荷物の山は、どう見ても収まる体積ではない。しかしベテランサーファーのミルトンは手際良く荷物と人を交互に押し込んでしまった。

みんな昨日のサーフィンとナイトフライトでスルメにみたいになっていく。夢にまで見たホテルの早朝チェックインはやっぱ夢、埠頭の倉庫を改造した会場に着いた。サウンドチェックにアート展示と時間が過ぎて行く。ここで話は逸れるが、アート展示のスペースでアルビー・ファルゾン大先生、アンドリュー・キッドマン、ジム・ミッチェル、サーフィンムービー“HUB”で3面を埋める作業にも追われていたのだが、ある事を切欠に見るからに危なさそうなオヤジと意気投合してしまった。彼こそデビルマン、お会いしたのは初めてでいるが高校2年生のときに親友のアネキがくれたサーフィン・ワールド写真集に載っていた2枚の写真とそのキャプションが強烈だった。

横山泰介先生を始め日本のサーフィン文化を支える方々が集まり、何かうねりになり始めている感じがする。大阪のFM、802とココロFMがPICO、マイク・マカーシー、ボウ・ヤングのインタビューを始めマスコミの取材と演奏が続き、この晩は終わり。片付けをするスタッフ



を見て「若い世代は優れている」と感じた。その証拠にオヤジたちは皆、気持ち良く酔っていた。それにしても朝からフタ付きマグカップに濃いウィスキーを入れて飲んでいたデビルマン、大きな衝撃を受け、尊敬せざるを得ないオーラを覚えた。グリーンルールの公式フォトグラファー糸井選手はデビルマンに話しかけられると両手を後ろに組んで、それは大きなブルドッグが降参するようで可らしい。ちなみに糸井選手はトーンで大波を攻めるサーファーである。私にとってはデビルマンの話は最高面白く、不明に感じた点はすぐさま質問を返した。高知ローカルで当時から最もアグレッシブだったデビルマン、すでに近くのギャラリーの足を踏みかけている。中でもデレク・ハインドと70年代後期に四国を一緒に旅して波乗りした話「神戸寄って行く、、、」とかは興味深い話だった。それは近所のデレクの知られざる過去が暴かれ愉快であった。同様にデレクの話は以前、サーフィン関係のトレードショーに出展した際に、うちのブースの前には偉くツッパったオヤジ2人がいた。カルフォルニアからサイケなエアブラシのレトロボードを展示して、小社のKEYOとマイケル・ピーターソンと張っていた、大多数の意見は前者の方がカッコいいであるが、小社のブースは一応ビデオも販売しているの小さなテレビで「リトマス」をエンドレスで流していた。そこにはデレクさんが異なるボードで滑るジェフリーズベイの9分弱の章があり不良オヤジ2人は真剣に見ていた。

やがて2人の親分格は「デレク、元氣そうだね」、それはジミー

山田さんだった。日本のサーフィンをテリー・フィッツジェラルド率いるホットバタードを通して世界に知らしめた張本人、70年代を一世風靡した鎌倉のカリフォルニアTシャツの仕掛け人である。デレクさんの近況から始まり、ジミーさんがカルフォルニアへ妻と犬達と渡りモーター暮らしから始まった過去、それらは話を聞くのが嫌いな私だが聴視率100%、昔のサーフィン・ワールド状態だった。

テリー・フィッツジェラルド、スティーブ・ウィルソン、そしてデレク・ハインドと四国へ行った時の話は貴重過ぎる。さらに深くって恐縮だが昨年ボウ・ヤングのツアーで四国の高松で森さんと言うサーファーにお会いした。宣伝をするが森さんは盛というラーメン屋や炉端焼を経営している。森さんの店はどこも最高に美味しい。私は行った事がないが機会があれば是非行きたい店である。住所は香川県、三豊郡。その森さんは1970年後期。例の物部でのセッションに遭遇している。「デレクのサーフィンはテイクオフする場所がぜんぜん違った。それは当時の四国にとっては大変な出来事だった。最近じゃWCTのトップサーファーも沢山四国を訪れるが、例えばケリー・スレーターだって来たけれど、今もってデレクのサーフィンを超えるものは見た事がない。」と語ってくれた。これ以上デレクに付いて書いても本末転倒、書くこと終わりが見えないので、ともかく日本サーフィン界の夜明けにいたサーファー、それはサーフィン黄金時代と呼べる。決して色褪せない、それどころか時が経つに連れ一層輝きを増す70年代である。その文化に憧れた自

分が今、オーストラリアから最高にカッコいいサーファーでシンガーソングライターを引き連れている、だからこうして様々な尊敬すべきサーファーと出会える。外ではボウさんとマイク、中でPICOがライブを行った。

で、この晩、一番決めていたのがPICO。夜も更けてくると大阪イケイケのオネーちゃん2人と仲良くなり、「みんなで飲みに行こう」ボーさんからはそういったのが嫌いなのでいやな顔をするが、しかも車はサーフボードと楽器でこの上オネーちゃん2名なんか無理、だがそこは長老のミルトン、「充分乗れるぞお、インドネシアならさらに6人は詰め込める」とヒザを抱え込んで小さくなり行動で示すと、流石にボウさんも「OK」という感じで身を屈める。ともかくバンは会場を後にした。走り始めると早速デューティーフリーのカエラ（牛乳で割る酒）がボトルで回ってくる。ホテルにチェックインして「飲みに行くぞー」とくるわけだが僕はダウン、というか、やれないオネーちゃん達にお付き合いするよりは懐かしい日本のラーメン、それがホテルの向こう3件先にあったのだ。それを見越したグリーンルールのスタッフと一緒にいったに驚いた。結局、ボウさんと私を除いた一行はネオン鮮烈な妖しげな街に消えていった。翌朝ブラックファースト（ホテルの横にフレッシュネス・バーガーがありその無料朝食券）を取りながら昨晚の結果の事情聴取を取ると、結局カフェー風の店でギター弾いて歌ってオネーちゃんの友達がさらに2人で、延べオネーちゃん4人、

全員トゥーマッチ・アルコールでダウン。最後に獲物を逃すのがオージーだ。サッカー・ワールドカップ、イタリア戦を思い出して欲しい。大阪心斎橋のホテルをチェックアウトして先ずは地下鉄、それから新幹線で大阪から横浜を目指す、若干3名乗り遅れるが何とか新横浜駅で再び合流。みんな電車が時間通りに来る事を信用しなかったのが甘い。オーストラリアとは違うのだ。で、新横浜で阿吽の合流を成功させラッシュアワーで満員の電車で目的地へ。ホテルまで200メートルのところで方向を見失うが、いきなり現れたオネーさんが「皆さん、何者？」と訪ねてきたので、「週末、開催されるグリーンルームに出演するご一行様」と伝えると名刺を差し出し・・・共同通信・横浜支社・・・とある。我々をホテルまで連れて行ってくれたので招待券を1枚渡して「記事にしてね」、・・・サーフボードを楽器を抱えた一行はさぞ奇妙に映ったのであろう。その晩は横浜チャイナタウンで美味しいものを、しかしローカルノレッジが皆無だからどの店が良いのか判断不可。いかんせ何百件あるのか分らないが、大中小の中華料理屋がどこまで行っても続く。インドネシアみたいな感を働かせてミルトンは値段と混雑度で選択に入る。PICOは見る物全部が新鮮のように瞳をクルクルさせる。マイク・マカーシーに至ってはまるで映画の中にワープしたようだ。ちなみにその映画とは「ブレードランナー」ですが・・・

ともかく店に入り各自メニューから選ぶ。私を除いて全員が中国式にシェアする事に反対、よって一人一品。DCは菜食主



義、ボウさんも人前では好んで肉を食さないで、考えようによっては楽。帰路コンビニでビールやコーンフレーク、ミルク、バナナなど買い込んでビジネスホテルに戻った。私的印象だがオーストラリアの物価の上昇は以上であるが依然として日本の物価は安くない。

横浜でのグリーンルームを待つ間、新宿のタワーレコード、原宿のMTVカフェ、浅草のゴロゴロ会館でイベント出演を行いがてら東京観光で日々過ぎて行った。中でも原宿はビックリものであった。一行はカメラを首からぶら下げ竹下通りや表参道を進んだ。表参道の交差点でPICOが立ちすくみ「あれ、あれ、俺だよ」と大きな看板を指差した。

見よ！そこにはエドウィンの屋外広告がそびえKEISON等に混じってPICOとマイク・マカーシーが並んでいるのだ。これには全員驚き、とうとう路上で看板バックに撮影会が始まった。横浜のホテルでの朝食に飽きて朝から街の大きなアーケードをうろついていると向こうからPICOが首からカメラをぶら下げてやってきた。「じゃ、朝飯でも」とPICOもホテルのバイキング朝食には参加していないようだ。PICOは開店したばかりの回転寿司屋に入りたいというので突入。皿によって値段が異なるが目の前で板前さんが握る。ネタは新鮮、安い皿を中心に5皿位づつ食し腹8分目、PICOも同じ位食べている。翌朝から我々は迷う事なく同じ店に4日通った。板さんやパート風のオバさんとも顔になりPICOはご機嫌、ボウさんやマイク、DC、ミルトン

、ジェフを誘うが「朝から寿司？」と見放された。

BLUE創刊号の撮影で、よせばいいのに林副編、そんな場所が一番似合わないマイクを新宿歌舞伎町に連れていったり最高でした。この模様はBLUE創刊号の中頃に5ページにわたって紹介されているので是非ご覧あれ。ちなみにボウさんは日を変えてのチャイナタウン、PICOは仲見世みたいな場所で撮影された。3人の集合写真は横浜大根橋埠頭と、カントリーなオージーと都会のミスマッチを狙った林副編の狙いはかなりクールであった。

土曜日 朝から会場入りするとすでに物凄い勢いでステージやアート、店の準備が進んでいる。映画「HUB」の監督クリスチアン、それにヌーサから映画に出演しているジェイコブも合流して着々と展示スペースが完成していく佐藤伝次郎先生は写真とKAZZさんの音楽で異色を放ち、デビルマンは大量のドライタイプのドッグフードを撒き散らし悪くない匂いを発し、横山先生は巨大なタイガーのモノクロ写真、と時間は経てど志しは変わらず。

午後3時半、マイク・マカーシーが弾き語りメロウでいて力強い時間を演出した。ニューアルバム「カーム・ウィンド」を中心にEP「シェルター&シー」、「ファイアー・フラッド・フリーダム」の中からも演奏。不思議なくらいハマるサウンド、歌も然ることながらギターが滅法上手い。それもそのはず普段は地元のコミュニティスクールでギターを教えているプロである。マイクの生まれ暮らすテリ

ガルはシドニー・ノーザンビーチ最北の地パームビーチからフェリーで30分余りである陸路だと2時間掛かる。近年シドニーへ通う人もいるようだが依然として街とは隔離されたカントリーなビーチタウンである。それがサウンドにも強く影響している。そして私はそのテリガルが好きである。

ボウさんは自分の出番前に出演したホワイト・バッファローに深い感銘を受け、涙流して見ていた。それが明らかに影響して力強い歌とギターでエキサイティングで、テンポの強弱も普段より強く、その分相棒のDCはクールにリズムをキープした。悪く言えば演奏が走っていた、という人もいるだろうがライブとはその場に応じて、今の自分を表現する場である。リハーサル通りに行うのもプロであるが、サーファーが奏でる場合、多くはその場に応じて早くなったり遅くなったりソロが変わったり間奏が長くなったり、それが面白い。

PICOのステージも大阪から延べ5回目、今晚が日本最後のステージだが最高であった。途中から名前を忘れて恐縮です、日本人パーカッションが加わり、客席を魅了した。それはPICOの歌声とスカイドッグのようにぶっ飛んだ演奏であろう。PICOはギターの1弦を張らず、低音域のリズムに徹し、ジェフのギターはその上に和音を構成する。で、ミルトンはヒザの上に寝かしたギターをボトルネックで捻らせる。スカイドッグは今亡きオールマンブラザース・バンドのデュアン・オールマンの愛称で、グイーン、グイーンと重く引っ張る

ギターを意味する。ニューアルバム「ルック」から曲選びをするのが極普通だが、というのもライブで魅了してCDを売るという鉄則があるにも関わらずPICOはアルバムからは2曲だけ、その他は全て新曲でステージを構成した。

PICOの演奏が終わりオージーチームのセッションとなりボウさんがボーカル、DCベース、マイクはドラムで参加。「モーニング・オブ・ジ・アース」から「シンブルペン」、それにニール・ヤングの「キープオン・ロッキング」を演奏して盛り上がった。この模様はスペースシャワーで見られるそうです。さらに何の打ち合わせもなく途中からパーカッションが見知らぬプレーヤーに変わっていた。PICOが「あれ誰だったの？」とビールを飲みながら訊ねたが誰も知らず、しかし「シンブルペン」と「キープオン・ロッキング」では見事なリズムで盛り上げてくれた。普通ならいきなりステージでパーカッションを叩く事を許すバンドはいない、がそれを快くウェルカムする、近年のサーフィン・ミュージックはそんなもので、それが良いから誰でも参加しやすく手軽なアコースティックが盛り上がっているで、その先に演奏重視のジャム、更なる先はビーチジャズ？ともかくリズムありがとう。本日全てのイベントが終了後、共同通信のおネーさんがビール片手にみんなと楽しそうにやっていた姿は心象的だった。ところで記事になったのかね？まあ、いいか。

ボウさんはお先に横浜を後に千葉のデビッド木下宅に1週間滞在、映画監督クリスチアンが自作



の撮影に張り付いた。結果は波に当たらず、フィルムは回らなかった。その上、日本滞在中最終日に東京で開催されたベン・ハーバーのコンサートに招待されたのはいいが翌朝の飛行機を乗り遅れ、高い正規代金払ってシドニーまで戻ってきたのは苦労だっただけであろう。

翌日曜日、アンドリュー・キッドマンは奥様ミッシェル第2児の出産が1週間遅れてライブには間に合わず、やってしまいました「契約違反」しかし、グリーンルームのK氏、「問題ありません」の一言でニール・パーチェス・ジュニア（以後NPJ）に省略）&ミルトン・ブラウンの「グラスラプ」セッションの決行が決定。WCTサーファーを含めて外人は奥さん出産、家族の出来事を理由にここの一番をパスする習性があるがこれも日本人との民族性の違い、文句は言えない。NPJは日本の帰路ミルトンとバリへ立ち寄るために、ついでに日本への納品を兼ねて山ほどサーフボードを持ち込んだ。その結果、演奏に必要なギターは持ち込めず。朝からギターを貸してくれ、と電話しまくった結果、同じ会場内にいた佐藤傳次郎先生のブースでギター弾くKAZZさんが「全く問題ないですよ、使ってください」ついでに一緒に演奏してくれますか？即席リハーサルが控え室で行われた。

KAZZさんなしではこの場をしのげなかったであろう。

またしても傳次郎先生、これは救世である。どこからの救いなのか、考えてみた。海からである。

1976年に遡るが・・・麻布の悪友Yのアネキがくれたサーフィン・ワールド写真集。当時、スケートボードが最大の楽しみだった僕は「メニークラシックモメンツ」のでカラパナが歌う

♪♪Young man dreams ride on Sunset... みたいに、いつかサーファーになろうと決めていた。当時の彼女と呼んでいたのか今持って分らないT子が住んでいる田園調布近郊で「良い坂」を見つけてはコンクリートを一気に下る、さらに壁と電信柱の間を抜ける今考えれば無謀な東京の子供なりのダウンザラインを満喫していた。頭を打ったり、肘・ひざ等の肉が血まみれで小石が入る状態、これでもかと脳震盪に陥る事もあったが生きていた。普段のように悪友Yと良い坂でスケートボード、、、言い忘れたが銀座のコアビル内にあるミナミスポーツで購入したオブライエンのもの、数十年後これを作った本人から凄い話を聞いたが、それは後日。僕等が滑っていると白いバンが近づき、坂の上で止まった。テイクオフポイントである。車からオカッパ+口ひげ+ヘルボットの男性は車の後ろのドアを開けてスケートボードを取り出し大きなターンをしながら坂を下った。開けっ放しのドアの中にはサーフボードが詰まっていた。ともかくロックとアメリカンな不良を気取っていた子供時代、六本木ハンバーインでバイトしたり、それなりに時代を楽しんでいた。ヒッピーからニューエージ、原宿のオリエンタル・マーケットでお香を買ってジョン・レノンのイマジン聴いたり・・・しかしそれ以上に悪友Yの不良のアネキがくれた「サーフィン・ワールドの写真集」は凄まじく輝いた。

そして今グリーンルームには傳次郎、デビルマン、横山泰介、、、「サーフィン・ワールドの写真集」のヒーロー達がいる。この巡り合わせ、一読者の僕が当時の誌の中にいるような錯覚さえ受けてしまう。肝心の「グラスラプ」セッションは「ナラビン」から始まり、（この曲は3年前、ニセコの玉井太郎制作のスノーボード映像作品にも収められている、最近ではコンピレーションCD「ウィークエンド・セッション3」、「surf-i-sm」にも収録されている）ニールとミルトンが交互に歌い、長いインプロビゼーションが続いた。ニールは時よりインディアンのような雄たけびを発し、予想外の展開が続く。KAZZのパーカッションが加速度的に恍惚に導きクライマックスは熱であった。昼、会場に到着するなりノンストップでビールを飲み続けて、演奏が終わったらウィスキーにいき、全ての終演まで飲み続けてなお倒れない。キラをバックハンドで30秒のチューブを決めるだけはある。「グラスラプ」の中でも人気の高いシークエンスである。夜、大観客を前に「グラスラプ」が大画面で上映された。20分の短縮版は東京で字幕を付けて編集された。デレクさんが近所の大波を11'4"のフラットロッカーのミニスワローテールで滑っている、大画面で見たのはボンダイでの上映会以来だが、少々画面の大きさが違い過ぎる。最近見た「グラスラプ」では一番である。ニール・パーチェス・ジュニアのキラでの30秒チューブ、カレンファミリー、そしてMPことマイケル・ピーターソン。心に響いてしまった「サーフィン」を信じて止むな」と！

NPJがフリークアウトしている。マイクが女の子に囲まれて恥ずかしいそうにしている。オヤジのミルトンまで日本レディーと乾杯している。グリーンルームに感謝！！

全てが終わり、撤収作業、出展スタッフのオネーちゃんが体の倍はある展示物を肩に背負って駐車場までの緩やかな登りの途中、ヒザを付く。後ろにいたオヤジがネーちゃんの荷物を担ぎ、誰もが最後まで助け合いそれはウッドストック以降の理想郷であった。サーフィンにID（共通性）を見出すもの同士だから信頼出来る、金勘定ばかりに熱心な音楽業界とは異なるバイブレーションで支配されていたグリーンルームだった。一方・・・フジロックは???

OAS

SPECIAL THANK

the green room festival
supported by EDWIN

<http://www.greenroom.jp/>

EDWIN

<http://www.edwin.co.jp/>

Garuda Airlines

<http://www.garuda-jpn.com/>

（最後まで荷物の超過ではご迷惑おかけしてすいません。ギターとサーフボードとトラベルバック。これなしでは成立しないので、成田空港のガルーダのカウンターのオネーちゃん、ごめんなさい）